

春の雪

つ く し

春の雪旅に見るうれしさにはやも涙の浮ぶなりけり
春の雪柳の枝にたわくくと降るがうれしき旅の宵かな
春のゆき音なくふれり猿澤の池にひたきて鐘がなるかな
戸をくれば鹿幾匹もむれてゐぬ南都の都はものみながよき
南圓堂ふるき丹塗の高欄に春の雪こそふりかゝりぬれ
朝あけのもやの中より大佛の鐘が大きくなり出てにけり
鹿二匹のつきあひをしてあるに我にもあらで掛聲をする
三笠山ふもとに居たる鹿二匹ミュー〜となきし聲を忘れず
杉の間に河は光れり新らしきよろこびをして山城に入る
ゆけと行けど白き田舎の道つきすはるかに比叡の高くすめるも
吹くとなく風のきくれははしかすかに涙くまれぬ旅は悲しや
ころよく疲れて浸る春の夜の湯槽の中の物思ひなさ

英國よりの初たより

白 菊

英國と云ふ所に着くのは何時の事やらと、丁度月の世界へでも旅立つ様な、遠い〜
気分を邦を出しましたが、日數積もれば争はれぬもの、萬里の波濤残りなくかけり盡
くして、今日(大正二年一月十五日)船は、こゝ、英國ローヤルアルバートドックに錨
をおろしました。「今度は屹度定期よりも早く着くでせう、何しろ船長は半歳ぶり
うちへ歸るんですから……全速力を出してゐるんですよ」とマルセーユに着く前にポ
イが笑ひ〜申しましたつけが、ほんとに、一日、早く着きました。「船が着いた
ら何分宜しく」と豫ねて、會社本店の何某様より、倫敦支店のさる方様へ、折り入つ
ての頼みの手紙を差し上げた事なれば、早く着かふが、遅く着かふが、ちつとも案す
るには及ばぬ事、着きさへすれば、萬事は御厄介をいたゞき得る事と安心して、ビス
ケーの浪に向きました。つねでさへ有名な難所のビスケー、況してや二十日許り前、
クリスマス頃の頃、大しきで、いくつかの船は沈められ、燈臺さへも大破損を蒙つたあ
どの此航海、如何あるべきかと、マルセーユ立つ時、一同非常な心配を致しました。

「其割りでも無かつた」とは、あとでの船員の話ですが、私にとつては古今未曾有の大しけでした。四日の間は、生きた心地も無く、苦しみ續けの大病人、頭痛鉢巻して絶食、ゆり上げ、ゆり下げらるゝ度毎に、身体の不したくはたゞ碎かれるやう、成る程世界に有名な難所と云ふ事が熟々骨身にこたえました。

四日目の夕方、「スープだけでも召し上がりませんか、今晚のは特別なんですから」とボーイは親切に持つて来てくれました。漸う／＼に起きなほつて、スープのコップを受け取り、今しも、一と吸ひ吸はふとする途端、ドツと寄せた大浪、アハヤと思ふまも無く、ガブリと、顔から、頭から、胸から、寢床から、いやと云ふ程、スープをかぶつてしまひました。泣き顔に蜂とは正しく此事、やすんで居てさへ大病人の苦しみなのに、御苦勞様にも、起きて、顔を洗はねばならず、着物をかへねばならず、寢床を更めねばならず……の難行苦行、而かも大浪は時々によつて來ます。油斷を見すかしは攻め入る寄手のやうに、其度毎に、そつちへバツタリ、こつちへバツタリと、投げ倒され相、辛うじていきなり、其處らに、つかまつては、そつちへヨロ／＼、こつちへヨロ／＼……「あゝスープさへ手にしなかつたら、こんな憂き目は見なかつたも

のをとしたゝかに愚痴をこぼしました。五日目の朝難所は全くこえてしまひました。同時に私の大病も全快しました。「一兩日後には愈々英國へ」と思へば、元氣百倍、身がなるになつて荷物取り片付け、夕方までには、萬事萬端ぬかりも無く、仕おはせてしまひました。ヤレ安心と、食堂でビヤノのいたづら、桃太郎さんの、浦島さんの、鳩ポツポツだの、をひいたり唱つたり一人で大陽氣、然し「昨日のスープ浴は如何でした？」「香はよし、味はよし、嘸結構な事だつたでせうね！」「一体牛乳風呂と云ふ事は聞いても居ますが、之れは又近頃珍しいスープ浴！」「珍しいスープ浴の御利益で其御元氣なんですね……」と、口々に、あふ船員船客から、ひやかされるには大しよげ……、部屋の中の出來事、ボーイの外には誰も知る人はあるまいと……口ごめしておいたれば……大威張りに安心して居たら、矢張り、天知る、地知る、人も知りけり、かくせぬもの、「もーおるんですから、いくら冷やかされても大丈夫」と、私は、十五日、未だ暗いうちからデッキに出て、船のとまるのを待つて居ました。彼方、電燈まばゆい棧橋には、船を待つらしい幾多の人かげ、「あの中には、定めし、私の迎も」と思へば、ひとしほに元氣つき、例令へんやうもなき嬉しさ、「私は何某です」若く

は「何某の代理です……あなたは本店の何某様から紹介あつた……あ……さうですか」とまだ見た事無い迎の方の……初対面やら……御挨拶やらの御言葉さへ、早やもう伺つてる様な心地、船はとまりました。梯子はおろされました。遅れじこのぼり来る……三人……四人……七人……八人……日本人やら西洋人やら入り交つて、やがて下に立つてる方はもうありません、……が、どうした事でせう、未だ、私への迎は……見えませぬ。夜は全く明けはなれました。「御機嫌よう、もうおります。長々御世話様になりました、サヨナラ」と迎の方と連れ立つて、勢よく出て行く日本人の一行、外國人の一團、私は未だ、空しく立つて居ます。九時……十時……十一時……も過ぎて最早や十二時、でも私は、まだ、空しく、立つてゐます。デッキに……一人、「ごなたも見えないぢやありませんか」と、晝食濟んだと云ふ格好して、つま楊子つかひながら、一船員は、デッキへ出て來られました。え……ごなたもまだ……」「一體確に紹介してあるんでせうか?」「それは確でございます……けど……其御返事を拜見するひま無しに立つて來ましたから……若しや……」「それぢや、いけませんとも……そんな亂暴な事して飛び出す人があるもんですか……そんなにしてまで早く來たかつ

たんですか?」とたしなめ口調、他人でさへさう思ふもの、況して本人の自分は、百も二百も思はぬわけでは無かつたけれど、私ならぬ公の御用、固より私の思ふやうにならう道理も無ければ、父の墓參さへ叶はぬ急々の旅立、方々へかうして頼んで上げたら、何とかして下さるだらうと、虫のよい一人ぎめ……思へば亂暴とも無鐵砲とも……あ……それも……皆餘議ないなりゆき、「私は、之れから、丁度支店へ行かなければなりませんから……、何某様の御都合を伺つて來ませう」「夫れはありがとうございました、何卒さうして下さいませ」と切に頼んで、棒になつた脚ひきすつて、私は船室へおりました。船室では大掃除の最中、何處でも、彼處でも、ベットは畳み上げ、洗面臺はひつくりかへして、床に水を流してゐる大混雜、「今日中に、何處もかしこもみんな、片附けてしまふんです、そして、物品の検査さへ濟めばうんと遊べるんですよ」と、ボーイ等は今しばしを大車輪の活動、あ、今朝まで住みなれし懐かしの我室も、今は最早入りもならず……今下りて來た梯子の下にしよんぼりとたゝすみました。折りから、通りかゝつた運送屋「送り出す荷物はありませんか?」とにこやかに問ふてくれました、「之れはよい序……そんなら何卒之れを」と今朝からデッキの片隅に積

んで居いた荷物二つを頼みました、「え……と、此宛所は之れで間違ないでせうね」
「まちがひ無いと思ひます」。

「どうもかう云ふ學校は聞いた事がありません、此市はよく分つてゐますが」「あら、さうですか」と私は思はず眉をひそめました。「イヤ、なに、御心配なさるには及びません。正しいと御信じなさるのなら、此荷物は只今おあづかりして行つて、社でよく調べて見ませう、そしたら多分分るでせうから……然し……萬一……分らなかつたら此船あてにおかへし致しませう」「そんな不確な事なら、出せません。荷物おくる許りで無しに私自身も行かなければならない所なんですもの。どうでせう誠に申しかねますが、荷物は此まゝにして置いて、あなたが、どうぞ、私のために、確な事を問ひ合はせては下さいますまいか」と頼み入りますと、ちつとしばらく考へてゐた運送屋は、いかにも心よく、「承知しました、電話ですぐ社へ聞いて見ませう。しばらくお待ち下さい」と、立派な体格の後姿は、見る／＼棧橋のかなたへ。いくらになるか知らないけれど、運送屋にも拂はなければならぬし、金貨を細かくしてもらはふと、私は事務室へ行きました、部屋と云ふ部屋は悉くしまつてゐて、皆留守の態、若しやと

思つて、猶も、そちらこちらへ行きつゝもごりつ、戸を叩いては耳を濟ます事幾度。

「誰が今頃、船なんかに残つてる人があるもんですか、船長さんを始め……さう、船長さんなんか今頃は、ロンドンのおうちで、お茶でも召し上つてゐらつしやるでせう。其外の方々も、みんなおひるのすむのを待ちかねて、をかへ行つてしまひました尤も當番の二三人は船首の方で荷上げの監督して居られます」と風呂番のボーイが云つてくれました。

私は更に船首へたどり行きました、どうして／＼其處へは寄りつく事も出来ない騒ぎ、人夫が一ぱい、右往左往、大仕懸な器械運轉の音轟々と、魂も轉倒するやう。私はす／＼と引きかへして、荷を置いてあつたデッキに立ち歸りました。之れは如何な事……荷物は影さへ止めず、はたには誰も見えませぬ。餘りの事に、驚くと云ふよりは、あきれはて、途方にくれ、立ちすくんでしまひました。稍々あつて、「其處にゐらつしやるのですか……私はぐる／＼方々御さがし申しました」といきせき切つて駆けつけたボーイ、「お荷物はね、たつた今しがた、さつきの運送屋が來て持て行きました」私はホツと胸なでおろしました「あなたをさがしましたけど一寸分らなかつた

もんですから、私が立ち合ひになりましたね」と忠義顔「あなたのが一番しまひで、もうみんな、集るだけ集つたから、今の汽車で出すんだ相で、大急ぎで停車場の方へ運んで行きました「ちや學校は分つたんでせうね？」「さうでせう！」「さうでせうぢや、ありませんよ。一体かう云ふ學校分らないと云ふから、よく調べて下さいと頼んであるんです、其事を何とも云はなかつたんですか？」「云ふ事は、ペラ／＼と、ほんとの英語で何だか云つてましたつけ。でも、荷は持つて行く、立ち合つてくれ、大急ぎで汽車に積む、を、聞くのが大仕事でした。之れさへ分れば、あとは入らない御世辭と察してイエース／＼と聞き流し、しまひにはグード、アフターヌウンと失敬してしまつたんです」。「何て困つた事をしてくれたでせう」と恨めば「ちや、私が、自動車を呼んで來ますから、之れからすぐ、停車場にゐらしつて……、まだゐるので、せうから、運送屋に聞いて御らん下さい」「そんな事が私に出来るなら、何で、かうして、今時分、一人、船に残つてるもんですか！」「……」「一体、あの運送屋は信用出来るんでせうか？」「そりや大丈夫、何十年と日本の船に出入りしてゐるんですから」「運賃もとらないで、どうすると云ふのでせう」「先き拂ひでいゝんです」と問

答してゐる處へ來られた、支店から歸りがけのさつきの一船員「や、とんだ事です、折りも折り、何某様は、此間日本へ役がはり、バリ御見物の上、成るだけ早く御歸國なさらふとする場合、『紹介あつた事は有つたけれど……』と、仰有つてゐる様な次第」私は魂消る許り失望して、しばしは言ふべき言葉も出ませんでした。稍あつて心をまとめ氣をしづめ、此上は「學校へ連れて行つて下さい」と御願してあるもひとりの方の來らるゝのを、待つより外には策も無く、今宵は、此まゝ船にと決心して、一夜の宿泊を嘆願しました。

「今晚のところは、どうにもしませうが……どうも此あんばいでは、明日の迎もあてにならないぢやありませんか」。

「……」無言で吐息をもらしました。

あゝ、船は日本の船、船員は船長の外悉く日本人、頼り無い一人旅の日本の女、よつく保護して下さつてちやんと行く先きまで着けて下さるだらう、着いたら、船の會社の御役人様に迎へられて、長い船路の疲をいやす事が出来るだらう、かれこれしてる中には、英國通の何何某學生殿に連れられて目ざす學校へ難なく行き得るであらう、

學校へ行つたら、えらい校長様に引き取られて遺憾なく研究する事が出来るであらう事がかう……ちやんと明瞭に確實に豫期豫想されてゐるのだから、何の心配は入らぬ事と、人にも云はれて出て來たら、此始末、思へば宇濶であつた。いくら、こつちで許り豫期豫想はして居ても、見も知りもせぬ方々の御都合は計り知らるべくもあらぬに、何とした宇濶、今更悔いて返らぬ事ながら、せめて返りの手紙見るまでは、待つて居たかつたものを、あゝ、急がばまはれ瀬田の唐橋、渡りに船を失つて、しかも闇夜に怒濤の淵をのぞんで立つ心地、ほんとに此分では「船が着くと云ふ定期の十六日には連れに來て下さい」と御願してある方もどんな事やら、若し來られなかつたらどうしたものか、その上荷物は何處かへ持つて行かれて、着のみ、着のまゝ、目ざして來た學校ははつきりせず、四方八方憂き事許り、あゝこんな憂き目にあふと知つたら、來るのでは無かつたと、勝手な愚痴を思つても見ました。

力無き身を、デツキの片隅の椅子にもたせて、上衣のポケットから守袋を取り出し、片側には、父や、祖母や、曾祖母の法名書いたるを收め、其又、片側には、氏神様を始め、尊き神々様の御札を收めたる、母がなさけの守袋、今更のやうに打ち眺

めて「うちへ歸りたい……」「おかあさん……」と思はず「肺腑をついて來る言葉……」の下から、とめども無く守袋に落ち散る涙、折りから、誰やら、デツキに上つて來る氣勢、つと立つて、私は彼方へ避けやうとしました。頭がグラ／＼ツとしてバツタリ其處へ倒れてしまいました。「おゝ、あぶない、どうしたんです」と側に寄り來るは、見るからに、慕はし相なおばあさん、「長い船路の疲れで……少し工合が悪いのでございませう」と突作の返答「さうでせう……長いんですものね、おゝ可哀相に顔色がよくありません……して失禮ながら、あなたは船客？ 船員？ かく申す私は、幾歳前、久しく東京で、傳道をした事のあるもの、今は故郷におちついて、専ら日本水夫のためには、はたらいて居ります。月に二度着く船を、私は何時も楽しみに、御訪問申してゐますのです。そして困つてる方を見つけたら、喜んで……固より困つてる方あれとは祈りませぬけど、困つてる方を見つけると喜んで、其方が幸福になるまで、私は私の及ぶだけ御力添へ致すのを天職と心得て居ります。あなた船客？ 船員？」「私船客でございます。英國へ勉強に參りました者、あした來らるゝ迎の方を待つて、かうして居りますの」。

「さうですか、何にせお一人になつてお淋しい事です、さうです、ソロ／＼、ノー
スウレツチ市へでも行つて見ませんか、私が御案内させよう。」
あゝ、何とした奇蹟、奇蹟とはかう云ふ事を云ふのでせう、ほんにかう云ふ事を奇蹟
と云ねばならないのです。思へばかうした場合に、かうした方に、しかも不思議に御
目にかゝつて、かうした御親切をいたゞくとは……確に奇蹟とより外には考ふる事が
出来ませんでした。私は心から感謝して、守袋を又、ポケットに収めました、「どうぞよ
ろしく」と挨拶し「一寸お待ち下さい」と一禮して私は事務室に船員を訪ひました、
「確な方とは思いますが……かう／＼した婦人」と云はせも果てず「そりや、日本水夫
のマンマさんでせう、今來られてゐますか？ドール」と室を出て彼方のデツキに向ふ
むいて立つてるミスバーマーの天使の様な姿を見つけるや「さうです、あれが、正し
く」と教へられ「では、あの方に連れられて市を見物して來ますから」と告げて、着の
み着のまゝながらも、外出の身だしなみ、ブラッシュユかけて、取りつくるひ、「お待
たせ申しました」と私はいそ／＼バーマーさんについて棧橋へと下りました。重つく
るしく霧立ちこめた英國特有の空に、夕日かくれた、うすくらがり、でも、私には、

旭輝く日本晴の心地、頬を刺す寒風もいとはしくはありませんでした。「お、寒い事」と
一丁許りあるいてからバーマーさんは私の身なりを熟と見つめてゐられましたつけが
「之を」と御自分のしておられた暖い毛皮の襟巻を、フワリと私にかけて下さいました
何とした親切、頼りにして來た同胞人にはたよる事が出来なくて、見も知りもせぬ英
國人にかうした親切をせらるゝとは、かうした親切を受けるとは實に不思議、さうし
ても奇蹟！「英國に着いた上で、色々物品を買ひ求めませうと存じて、實はわざと何
も持つて參りません、若し、今買ふ事が出来るなら私は好都合でございますけど……」
「そんな事なら見て上げませう、一体何がほしいんです？」「さし當り冬の日用品、
ゑり巻だの、マッフだの、手袋だの……」
「おやすい御用です」と其處から電車
に乗せていたゞき、十五分の後には、店頭美しく飾つた大商店の奥に腰をおろしまし
た、「お、之れは割りに安い、良い品、あなたによく似合ふ」と數々の品をよつて
いたゞき、両手に持ちきれない程一バイ買ひました、「これですつかり此冬の英國レ
デーの用意は出來ましたね」とバーマーさんに笑つて顔を見られました時は嬉しいや
ら、さまりわるいやら、さつきの悲觀は大半消散してしまひました。

「あなたは大變金持の方ですね」と、小さい、聖い食堂で、あつさりした夕食をふるまはれた後、バーマーさんにからはれました。「どう致しまして、私のお金ぢやございません、お上からいたゞいた……つまりお上のお金です」「それなら猶の事幸運見ですよ、自分のすきなものを、お上の金で……金貨をゾロ／＼と惜じげもなく出して……買ふのなもの、何と云ふ恵まれた方。」

ほんに、恵まれたればこそ、不肖の身にてありながら、留學生と云ふ榮譽をも荷ひ得たもの、留學生となりたればこそ、かうして英國と云ふ國にも來られたもの、英國に來たればこそ、天使の様なバーマーさんにもあはれたもの、バーマーさんにあつた上は、明日の迎が來やうと來まいともう大丈夫……、ほんに私は恵まれた人、今朝迎の方が見えられなかつた事も、荷のおくり先き、はつきりせぬも、何も彼も、眞の幸福の味を、よりよく、知らせんための薬味、と、思へば、何も彼も、人も世も嬉しく、況して山よりも高く海よりも深き親の恩、夫れよりも高く深きお上の御恩、天の恩、人の恩、只一身にあつめし心地して、今買つて來た襟巻をかけ、手袋の上からマツフにくるまつて、其外の荷物はバーマーさんに持つてもらつて、船へ歸りました。大掃

除濟んで、隅から隅まで奇麗になつた船室へはいつて、バーマーさんに手傳はれて、寢床をこしらへると「さあ、お休みなさい、おいのりをして上げませう」と云はれてやすめば、ひざまづかる、バーマーさん、赤心こめた五分の祈り、「安心してお休みなさい」と、やさしい言葉をあとに、バーマーさんのなつかしい靴音は、彼方へ……、私は頭をもたげて、其足音が聞えなくなつても猶耳をそばたてました。もう十時日の本の日本では今や十六日の夜あけ方、「娘は今日英國に、無事に着くであらふ」と母上は、もうお目ざめになつて、考へて、喜んでゐられるかも知れない。あゝ嬉しい喜んで下さい、おかあさん、私はかうして、恙なく英國にもう着きました。いざ安らかに英國の第一夜！赤の御飯の蔭膳するらるゝ母上を夢になど見ませうよ、さらば！。